

マン兄弟の確執 — 1903~05年 —

(その 6)

三 浦 淳

IX. トーマス・マンの結婚とハインリヒ・マン (承前)

(1) 転換期のハインリヒ・マン——作品から見て (承前)

b) ランゲン書店のための自己紹介文

1904年6月、ハインリヒは出版元であるランゲン書店のカタログのために自己紹介文を書いている。ごく短いものなので全文訳出しよう。

*

私の出身については、弟の有名な長篇小説からよくご存じのことであろう。我が一族はハンザ同盟都市で部厚い二巻本分の商人生活を送った後、ロマン民族の血が混じたことにより——ニーチェによるとこれは神経衰弱症患者と芸術家を生ぜしめるのだそうである——とうとう芸術家を生み出すに至った。私は一人前になるやすぐにイタリアに帰った。そう、しばらくは私は故郷にいる気分だったのである。しかしそこも結局は故郷ではなかった。これがはっきりするに及んで、私には多少のことができるようになった。二つの種族の狭間で一人きりでいると、弱虫でも強くなるものだ。周囲を気にせず、回りに容易に動かされず、ひとり小さな世界と存在しない故郷とを作りだそうと夢中になる。どこにも血を同じくする者がいないから、肩をすくめつつ世の規制をすりぬける。気質を同じくする公衆をどこにも見いだせないから、広汎な影響力を持つとうとはせず、唯一者にのみ分かれたいと願う。それによって気持ちは激しさを増すのだ。きつい道のりだ。夢想のかたわらに野獣を配し、諷刺のかたわら

に熱狂を置き、人間嫌いと優しさとを結びつける。他人を刺戟することが目標なのではない。他人などどこにいるというのか。むしろ唯一者のためにセンセーションをまきおこすのだ。おのれの体験を富ませること、おのれの孤独を滋味豊かにすることが目標なのだ。⁽⁶⁾

*

ここから何が読み取れるだろうか。まず、弟の『ブッデンブロック家の人々』の成功が彼に及ぼした屈折した影響である。弟の成功という事実をまず投げ出すように書き、その後で孤独な道を行く自分を定式化するハインリヒの心象風景は想像に難くない。すでにこの時、『ブッデンブロック家の人々』は二万部を突破していたのである。⁽⁷⁾

先にも引いたように、ハインリヒは1904年4月に友人 Ewers 宛て書簡で、『愛の狩猟』に絡めて、自分は大衆に受けるタイプではなく少数の愛好家向けの作家だと述べていた。また1904年1月8日付のトーマスの兄宛て書簡から分かるように、ハインリヒは弟に対しても《あらゆる人畜無害な関係を放棄する！》などという表現を用いている。いずれも、弟の長篇の成功を認めつつも、それとは対蹠的な場所に自分を位置づけそれなりのプライドを保とうとする姿勢を示すものと言っていいだろう。

しかしである。それにしてもこの文章で表白されたハインリヒの孤独感は、いささか度が過ぎているのではないか。確かに作家としての知名度で弟に遅れをとり、また『愛の狩猟』を手厳しく批判されはした。しかし売れ行きはともかくとしてすでに何冊もの本を彼は出版していたのであり、書店がカタログを出せばそこに一筆書いて欲しいと頼まれる程度の存在にはなっていたのだ。その彼のこの筆致は異様な印象を与える。弟との作家としての知名度の違いだけで、人はこんな文章を書くものだろうか。

この点は転換期のハインリヒ・マンを考える時、重要な意味を帯びてくるのである。

c) 長篇小説『ウンラート教授 Professor Unrat』

『ウンラート教授』は、ある意味でハインリヒ・マンの最も有名な作品である。小説そのものによってというよりは、のちに映画化されたことによってではあるが。『ウンラート教授』を原作とする1930年制作の映画『嘆きの天使 Der blaue Engel』は、エーミール・ヤニングスとマレーネ・ディートリヒ主演で大ヒットし、ディートリヒを一躍スターにした。ただ、映画が有名になりすぎて肝腎の原作者の方は忘れられ気味の感がある。日本で出ている映画の資料集には、この映画は掲載されているが、原作者は名前すら出てこない。⁽⁸⁾ 原作『ウンラート教授』の邦訳も戦前（1932年）は出ていたが、戦後は再刊もされておらず新訳も出ていないから、一般の読書人の目に触れる機会はまずないと言ってよい。

『ウンラート教授』は『愛の狩猟』に続いてハインリヒ・マンが執筆した長篇小説である。のちの1922年、彼が Paul Hatvani に宛てた書簡によると、フィレンツェで新聞を買ったところ、ベルリン発のニュースとして某教授が歌姫とねんごろになって転落の道をたどったという記事が載っていて、それにヒントを得たのだという。⁽⁹⁾

しかし著作者自身のこの述懐は必ずしも正確ではない。Albert Klein の指摘によれば、彼が作品を書くにあたって実際に参照したのは „Berliner Tageblatt“ 紙で、1903年12月21日から翌年7月8日まで何度か掲載された記事はかなり詳細を極めており、内容的に『ウンラート教授』と重複する部分が相当あるという。⁽¹⁰⁾ Willi Jasper は Klein の研究を引用しつつ、ハインリヒの上記発言は自作の種本をわざと曖昧にしようとしたものではないかと述べている。⁽¹¹⁾



『嘆きの天使』のパフレット

完成は1904年だが、細かい成立経過ははっきりしない。ハインリヒの1947年の Karl Lemke 宛書簡では、《1904年に数カ月間で》と簡略に記しているだけだ。⁽¹²⁾ Paul Hatvani 宛て書簡ではこの長篇にかかずらっていたのは《1903年末（フィレンツェ）から、1904年8月（南チロルのウルテン）まで》と述べている。⁽¹³⁾これは „Berliner Tageblatt“ 紙に転落教授に関する記事が載った期間とほぼ一致している。恐らくハインリヒは新聞の報道と並行するように執筆を進めたのではあるまいか。1904年12月23日付 Ewers 宛て書簡で彼は、来年三月には新作の長篇を送れるだろうと書いている。⁽¹⁴⁾

1905年初め頃にランゲン書店から出版され、当初の二千部はすぐ売り切れ、翌年に二千部が第二刷で出た。1905年9月15日付 Ewers 宛て書簡では、あの小説は予想に反していくらか成功を取めたと書いているから、⁽¹⁵⁾初版の売行きがまあまあであることが確認できたのであろう。しかしこの小説が本格的に売れるようになったのは第一次大戦中のことで、1917年に初版からの合計で二万部を突破している。⁽¹⁶⁾

さて、以下ではまずこの長篇の筋書き（原作は映画とは多少異なっている）を簡単に紹介した上で、当時のハインリヒ・マンにとってこの作品がどういう意味を持っていたのかを考えてみよう。

*

リューベック（作中都市の名は出てこないが、描写からして故郷のこの都市を指していることは容易に見て取れる⁽¹⁷⁾）のギムナジウム教授ラート（Raate）は、生徒からウンラート（Unrat＝ゴミ）とあだ名される初老の男である。生徒に対しては厳格であり、罰を与える時の彼は教育者というよりは憎悪の固まりである。

ある日彼は生徒の作文ノートに「芸人ローザ・フレーリヒ」の名を見る。息子が悪い女と付き合っただけで出世し損ねた苦い経験を持つ彼は、しかし教育的な配慮というよりは妙な好奇心にかられて街を歩き回り、青い天使（blauer Engel）の看板のある店に入り、その舞台上で歌っているローザを見る。そして観客の中に生徒がいるのを発見し後を追いかけるが、それが機縁でローザと話をすることになる。57歳の彼は、この時灰色の日常生活とはまるで異なったもの

に包まれるような気分になる。店を出た彼は、場内で見かけた三人の生徒と出くわす。彼が今日見たことは報告するぞと言うと、生徒側も同じことを言い、教師と生徒はかくして同罪故の膠着状態に陥る。

教授は次の夜も店に出かけ、舞台に出るローザの身仕度を手伝ったりする。舞台の成功にもかかわらず、楽屋に戻ると「悲惨な生活よ」と言って泣く彼女。彼はローザを守ってやらねばと思う。

夜な夜な店を訪れ、そこでの仕事に習熟し、気分の変わりやすいローザの性格に慣れるラート。しかしやがて噂が街に広がる。年長の教授が彼に警告するが、彼はむしろ旧習に染まった連中を軽蔑する。ほどなくローザと結ばれた彼は、例の三人の生徒が現れても優越感をもっていない。

ちゃんとした住まいが欲しいと言い出したローザのために彼は奔走する。学校での彼の立場は悪くなる一方。町にも噂が広まる。

別の件で例の生徒三人は裁判にかけられ、ラートとローザも証人として出頭する。この三人はいずれも町の上流市民の息子であり、彼は、貴様ら特権階級はおしまいだと口走る。しかし一方でローザの証言で彼女が生徒の一人と関係を持っていたことも分かり、彼は落ち込む。

裁判により彼はますます町の人間に後ろ指を指されるようになり、そのせいで復讐欲に燃える。例の生徒の一人は英国に留学、一人は放校、もう一人は自主退学となる。ラートも讖首される。彼は少数の好意的な人たちの忠告をも無視してローザとよりを戻し、懸命に尽くす。彼女も彼に優しい気持ちを抱き始める。やがて彼は彼女に結婚を申し込むが、ほどなく彼女に小さな子供がいることを知る。

最初はラートの教授時代の蓄えで暮らしていた彼らだったが、やがて貯蓄も底をつく。ある日彼らの住まいに知人が来て賭博をやり、財布の中身をはたいてしまう。これを契機に彼らの住まいに町の住人が出入りし賭博に打ち込むようになる。市民の一人が賭博で破産した時、ラートは一つ復讐を果たしたと思いきや狂喜する。やがて賭博やローザの色じかけで何人もの市民が破滅にいたる。しかし彼はローザが他人と関係するのに苛立ちを隠せない。ローザの前に英国に行ったあの生徒が現れる。親密に話す二人の前にラートが現れ、ローザの首を締め（しかし彼女は逃れる）、元生徒の財布をひったくる。元生徒は警察に通報、やがてラートとローザは逮捕される。

*

『ウンラート教授』には副題がついている。「暴君の最後 Das Ende eines Tyrannen」というのである。

この副題だけを見るなら、或いは筋書きをざっとたどるだけなら、作品の主題は文字通り「暴君の最後」であってラート教授こそその暴君だということになる。とりわけのちの『臣下』に見られるような、ヴィルヘルム朝ドイツやドイツ人批判に力を傾ける知識人ハインリヒ・マンというイメージからすれば、彼の描いたラート教授は旧弊な帝政ドイツの生んだ権威主義丸出しの、批判されるべき俗物なのだと思われ取られても不思議はない。

しかしことはそれほど単純ではない。ラートと彼が追いつく三人の生徒を比較してみると、力関係は二重になっている。確かに学校内の教授と生徒という関係で見れば、ラートは三人に対しては絶対的な強者である。彼はことあるごとに生徒たちを難しい試験や宿題で悩ませ、少しでも気に入らないと納戸(Kabuff)入りの罰を与える。

しかし学校を離ればどうか。ローザの店に出入りしていた三人の生徒はいずれも町の上流市民の息子である。それに対してギムナジウム教授のラートは、若い頃は未亡人に学資を出してもらって学校に通い、卒業後は契約に従って、特に女として魅力的でもない彼女と結婚したという経歴の主である。そしていったん学校を追われればラートは初老の失業者に過ぎないが、生徒たちは就職したり外国に留学したりするから、前途を閉ざされることはない。またラートはローザと知り合うと外聞も顧慮せずひたすら彼女を愛するが、生徒の方はそれほど純情ではないのだ。特にローマンという、放校後に英国留学する生徒は他に関係している女性がいて、別段年上の女にひたすら入れあげている訳ではない。(このローマンは、Lohmann という名前——Luiz Heinrich Mann が含まれている——や、文学少年で父が領事 [Konsul] であるという設定からして、ハインリヒの若い頃を彷彿とさせる人物である。⁽¹⁸⁾)

こうしてみると、主人公のラートなる初老の男は、権力にまかせて年少者を虐待する人間だとか、絶対的な強者だとか見て済ますことはできなくなる。副題は読者をミスリードしかねない罠なのだ。Klaus Schröter が、この小説は

ヴィルヘルム朝ドイツの学校を活写しているとしながらも、作中出てくる Tyrann だとか Anarchie だとかいう一見政治的な概念は、むしろ激しい情熱や愛情を心理学的に分析する表現なのだと指摘しているのは正確である。⁽¹⁹⁾ また Marcel Reich-Ranicki が、我々はこの作品を読み進むうちにラートに同情しないではいられなくなる、彼は笑止千万な人間とは言えなくなるのだと述べているののも的確な読みだろう。⁽²⁰⁾

この作品に優れているところがあるとすれば、そうした人間関係のパラドキシカルな側面を表現し得た部分であろう。全体としてみると構成や文章表現には粗さが目立っていて、『愛の狩猟』以来の弱点が克服されておらず、秀作と言うにはためらいがある。映画化される前、第一次大戦中に二万部を突破するほど読まれたというのも、質的に優れているからというよりは、題材自体が扇情的で娯楽読物として手ごろだったからではないか。『ウンラート教授』の質という点では、すぐ後に述べるようにトーマスもかなり手厳しい評価をしている。

しかしハインリヒの作家としての変化という視点からは、また別の見方ができる。前作長篇『愛の狩猟』やその前の長篇三部作『女神たち』と比較して明瞭に異なる点がある。主人公が初老の男で、しかも最後まで自分の情念を貫いてしまうところだ。それまでのハインリヒの長篇は「弱い若い男—強い女」というパターンが通例であり、主人公もしくはそれに準ずる男は若く、精神的にも肉体的にも虚弱で女にリードされたりいいようにあしらわれたりする存在であった。それがここに至って変わっている。初老のラートは町の人間に嘲笑されながらもローザへの愛情を貫き、市民たちへの復讐に奔走する。ローザが途中で多少の浮気をしようともそれを吹き飛ばしてしまうような情念の強烈さ。いささか常軌を逸し狂気じみたところがあるにせよ、ここに表現されているのは中年男の骨太な強靱さであり、思いこんだら迷わず他人の目を気にせず徹底的にやりぬく意志である。ハインリヒ・マンはここで初めて男の強さを表現し得たのだ。

ヒロインのタイプにも、前作『愛の狩猟』後半で見られた変化がそのまま現れている。アルテミス＝ディアナ型からアフロディーテ＝ヴェヌス型へ。男をよせつけない固い女、或いは男をリードするたくましい女から、浮気っぽいところはあがるが可愛らしく、男の保護意識をくすぐるような女への変化である。

こうした変化はハインリヒ・マンの日常や生き方とまったく無縁なフィクションということはできない。初老の男の頑張りを表現し得たのは、ハインリヒ自身33歳になりもう若いとは言えない年齢にさしかかっていたからだろう。彼はやがてイーネス・シュミートという女性と知り合い関係を結ぶ。『ウンラート教授』でローザという女を造型したこと、これも無縁ではなからう。そしてハインリヒの作品を読んだイーネスは感想を彼に書き送っているが、それに対して彼はこう答えている。

《あなたが『公爵夫人』より『ウンラート』を高く評価するのは、とてもよく分かる。あなたとの出会いと時期的に近い作品である『ウンラート』の方が、あなたにも近い作品なのだろう。私も徐々に成熟してあなたの見方を理解できるようになってきた。(『公爵夫人』を書いた頃だったら、私たちはお互い余り話すこともなかっただろう。適切な時期に出会うこと、これが大事なのだ。そして大事なことは奇妙にも運命次第ときている。) ウンラートは、この老いた笑止千万の怪物は、少なくとも〔ローザ・〕フレーリヒを愛し、世間から彼女を守り抜き、傷だらけの愛情のありつたけを注ぐ。だからこそ彼は公爵夫人より人間的なのであり、だからこそあなたは彼の方をよく理解するのだ。この男は(驚かないで欲しい!)いくぶん私に似ている。あなたを愛している私にだ。それに対して『女神たち』の内容は、今の私とはいささかの共通性もなくなっている。》⁽²¹⁾

一方、トーマスは兄のこの長篇に手厳しい評価を下している。それはこの作品が出版された1905年になってからであり、同年2月に彼が結婚した後のことであるが、ノート7の147ページ以下に彼はこんな記述を残している。

《アンチ・ハインリヒ。

無為の苦しみへの恐れから粗悪な本を次から次へと書くのは倫理にもとることだと思ふ。

「芸術家の娯楽読物」——よかろう。しかし結局はこれは形容矛盾ではないか!

ここしばらくドイツで書かれたものの中で、最も面白おかしく軽薄極まりない代物だ。

無茶苦茶ではないか! 生徒のエルツウムは、作文を書き出す前に納戸に入れられるのに、作文を提出する! 煙草屋や喫茶店主がギムナジウム

教授の教え子だというのだ！ こういったことは「芸術家の無頓着さ」と言えばかろうじて説明がつこうが、恐らくはそれ以上のものだ。つまり娯楽読物の精神がめいっばい働いているのだ。この作品は先々まで読まれることを考えていないようだ。

どうやらオートミールを食べると恐ろしく軽薄になるに違いない。そして生産的にもなる。だが生産性とはひよっとしたら軽薄の一つの表れ方に過ぎないのかも知れないのだ。

あり得ないことだらけで、目を疑ってしまう。

ウンラートはコンサートホールで「納戸に入れ！」と叫ぶのだ！

神をも恐れぬ印象主義。（「彼は険しいところを上った」）⁽²²⁾

トーマスは無論、この感想を兄には漏らさなかつただろう。『愛の狩猟』で率直な感想を述べて兄の不興をかったのに懲りていたからだ。少なくとも現存するこの頃の往復書簡には『ウンラート教授』への言及はない。なお Mendelssohn はトーマスのこの感想に触れて、ハインリヒが次々と小説やエッセイを書いたのは経済的な理由も大きかつたろうと述べ、また彼がその時点で『ブッデンブローク家の人々』のような成功をおさめていなかったこと、愛のない孤独に直面していたこともあろうと述べている。⁽²³⁾しかし、文章や筋書きをきちんと練り上げずに次から次へと作品を書く兄に、トーマスが作家として根本的な不満を抱いていたことも確かだつた。⁽²⁴⁾

d) 雑誌『未来 Zukunft』への投稿

1904年10月初め、ハインリヒは雑誌『未来 Zukunft』にエッセイを載せた。一カ月前の同誌でカルル・イェンチュなる人物がフランス批判を行ったので、それに反駁文を寄せたのである。同誌編集長ハルデンへの手紙という形式で書かれていて、この時期のハインリヒの思想的転回を示す重要な文章であり、またさほど長いものでもないので以下に全訳する。⁽²⁵⁾

*

尊敬するハルデン氏よ、カルル・イェンチュ氏が貴誌でフランスについて述

べていた事柄に関して、私はフランスに多くを負っている小説家として抗議したいと思います。フランスがロシアと「心理的に近親関係にある」ですか！「富めるも貧しきも、高貴も卑賤も、時の支配者に対して従順で卑屈」ですか！ここではルイ十六世、シャルル十世、ルイ・フィリップ、ナポレオン三世のことが念頭におかれているのでしょうか。ということはつまり、フランスの民衆が一世紀の間に三度の政府転覆を行い、内戦を一度敢行したのは、フランス人はロシア同様野獣の心の持ち主だと陰口を叩かれるためだったというわけですか？本当は、フランスは共和国になって以来初めて落ち着きを見せ始めているのです。フランス民衆は「外面的な文明」の道をたどって共和国という政体に至ったのではなく、やむにやまれぬ気持ちで共和国を選びとったのであり、それは内奥から出てきたものの結果であり、人権に対する非妥協的な感覚のためであり、批判的で文学的な志操のためであり、知的な潔癖さのためなのです。実際、この潔癖さが実践的理性を純粋理性と別物と考えること、精神によってとうに凌駕された政体を現実に妥協し、快適で便利だからと言って選ぶことを禁じたのです。仮に、一八三〇年や一八五〇年のように、共和国の代わりに君主をフランス民衆に押しつけたり強要したりする機会があるとすれば、——その君主が単なるブルジョワにすぎなかりと、或いは企業家であろうと——「従順で卑屈」なフランス人がどうなるか、お分かりになるでしょう。共和国は民主的ではなく官僚的だ、とおっしゃる。しかしこの二つは対立するものではありません。肝腎なのは、官僚制のもとでは誰もが自由におのが道を選べ、官僚制の頂点、すなわち大臣の椅子には、弁護士であれ商人であれ作家であれ労働者であれ誰でもすわれるのだということです。ベーベル¹⁾がジョレス²⁾を反駁しつつ賞讃した君主政体とは違って、外交が貴族の、行政が学生組合員の、将校の地位がまたしても貴族の、そして「第一級の」医療手当が金持ちの専有物であることは、ここでは許されないのです。ドイツの社会民主主義者たちはこうした条件から余りに安易に目をそらしています。彼らにあっては平等も自由も遺憾ながらごくさきやかにしか問題にされません。彼らの存在や影響力は、軍隊式の規律と同根です。ドイツはこの先まだ国粋主義的で反動的な意識を清算しなければならぬでしょうが、ドイツ社会民主主義者たちはこの意識から抜け出せず、時代遅れの政体であっても快適で福祉的な立法を許してくれるならこれを認めてしまう有様なのです。彼らにとって王は利用できさえすればトゲた

ることをやめる存在なのです。彼らは金銭の問題、労働者の金銭の問題に縛られています。そしてこの問題は労働者だけに関わるので、社民党は労働者を越える影響力をほとんど持ち得ないのです。うっかり社民党に連帯を表明する知識人は、党に肘鉄を食らいます。これに対してフランスの労働者の民主主義は、より大きく長い伝統を持った民主主義の一部としてあるのです。そしてこの大きな民主主義の第一の存在基盤は理念とプライドであって、金銭の問題ではないのです。フランスの労働者にしても税制改革を望むことに変わりはありません。ただその改革を、労働者に依存し労働者を抑圧する者の手から受け取ろうとは思わないだけです。彼らの目を階級の利害からしばらくそらし、危機にある共和国の擁護のために立ち上がらせるためには、いかなる奇策も要さないでしょう。彼ら自身よく知っているのです。巧妙な専制政治下では太った臣民が存在することもある、しかしそれはあくまで臣民にすぎないのだと。

(訳註)

- 1) アウグスト・ベーベル：(1840~1913) ドイツの政治家。労働運動の指導者でもあったが、中庸路線をとった。
- 2) ジャン・ジョレス：(1859~1914) フランスの哲学者・政治家。社会主義運動の指導者。

*

後年のハイノリヒ・マンを彷彿とさせるエッセイではあるまいか。己れの文学的素養の多くを負っている国が粗雑に批判されたことに怒り、全面的にフランス共和制を擁護する筆致は、熟年期の彼の文章そのものである。そして『フルヴィア』からも看取された、政治性へと向かう彼の新しい動きは、エッセイというこの文章の性格からしてもより明瞭に表れている。

これだけを読むなら、トーマスとのいざこざによる精神的落ち込みなど片鱗もろかがえない。しかし物事はそう単純には進まない。彼がこの時点でまだ心理的危機から脱していなかったことは、次で見る母の手紙から分かる。ハイノリヒがこのエッセイに表れている方向性を完全に選ぶとるには、もう一つのエッセイが書かれる必要があったのである。

以上、この時期に書かれたハインリヒの作品をほぼ執筆順にたどってみた。要約するとここに見て取れるのは、1) 政治的な方向性、2) 極度の落ち込みと孤独感、3) 中年期を迎えた男の開き直り的な強さ、と言うことができよう。

さて、フランスを擁護する上記エッセイが雑誌に載った1904年10月初めから幾ばくもたたない頃、彼は母に手紙を送り返事を受け取った。次にこの母の返信を検討して、ハインリヒを襲っていた心理的危機の正体に迫ることにしよう。

(2) 転換期のハインリヒ・マン——母の手紙

この頃のハインリヒ・マンの精神的落ち込みぶりを示す資料は、上で引いた自己紹介文以外にもある。母ユーリア・マンがハインリヒに宛てた書簡である。これはハインリヒの手紙への返信として1904年11月20日付けで出されている。ハインリヒの手紙の方は残されていないが、母の返信からある程度内容は分かるので、やや長くなるが最初の三分の二ほどを訳出しよう。

《親愛なるハインリヒ、南国に住んでいるお前のもとに旅行に来てみたらという忠告には感謝あるのみです。何しろ私のことを思ってくれての提案ですから。でも、いつどこへでも行きたい時に行ったり来たりするお前のような気軽な独り者は、誰でもその気さえあれば同じようにできるのだと考えるのでしょね。私には家具を持ち込んだ住まいがありますし、ヴィユもいますし、クリスマスや結婚式の準備もしなくてはなりません。これらはどれもお金のかかることなのです。もしお前のところを訪れると、ヴィユの下宿代一カ月分に百マルク、私のために二百マルクかかるでしょうから、ということは正味百七十マルク余分にかかるわけで、私の風邪はよくなるかも知れませんが、帰ってくれば二月から五月にかけてはまだ寒い季節ですから、温和な気候の南国から戻ればまた風邪がぶり返すかも知れません。それにもう咳も気にならなくなりました。咳をしてもさほど苦しくないのです。ただリューマチには悩まされています。これは一冬ずっとリヴィエラにでも行かない限り治らないでしょうし、そんなぜいたくをする訳にもいきません。

さて、ハインリヒ、次の話題に移りましょう。先日お前がとても率直に手紙に書いてきてくれた事柄についてです。(ちなみに、手紙の素晴らし

い文体にはいつもながら感心しました。特にお前が今心中穏やかならぬ状態にあるだけになおさらのことでした。) ところで、その心中を考えると私も気分が沈んでくるのです。お前の気持ちがすぐれないのも心に理由があるに違いありません。もしかしてそれはいまだにあのことが原因なの？ トーマスとレーア家が他の人間同様にお前の最近の小説〔『愛の狩猟』〕を鋭く批判しているためだとしたら——お前が他の兄弟姉妹とうまくいっていないのを、お前のためにとても残念に思います。ハインリヒ、彼らから離れないで、時には彼らに親しみのこもった手紙や批評を送ってあげてください。そしてお前が文学界で現在のトーマスほどに認められていないと感じても、それを彼らの前で表さないで欲しいのです。もし表すなら、お前自身が不愉快にならないようにやって下さい。お前は世間の目の前に鏡を立てようとしてました。そしてところどころで忘恩と不興をその返答として受け取ったのです（彼らが余りに的を射抜かれたと感じたからだということは認めますが）。——でも同時に、お前も今回は十分に意を尽くしたとは言えないし（私の意見ではですが）、脱線したところもあるのじゃなくて？ でもお前の芸術作品に処方箋を書こうなどというのは不遜な行為ですね。ただ私は率直なところを伝えたかっただけです。話を戻しましょう。兄弟姉妹、友達、母、そして子供の間の個人的な接触が断たれていない限りは、絆は切れていないのだと私は思うのです。私はこの種の経験は何度かしてきましたし、いったん事が起こった時は絆が切れないようにと母の立場でできることは何でもしてきました。そうしたやり方が間違っていないことは経験済みです。ハインリヒ、どうかお願いですから、私の忠告に従ってトーマスとレーア家から離れないで下さい。彼らと会ってもつっけんどんにしないで、あなたが繊細な感受性を持った読者層の求めるところにも応じる能力があるということを、これから見せて下さい。余り理想家過ぎるはいけません。同時代の人たちのほんの一部にしか理解されないのでしょうから。トミーだって、誰もが無条件に自分を賛美しているのではないし、支持してくれる人でも自分の書くもの全部を気に入ってくれる訳ではないことくらい、分かっています。ちなみに、お前がこないだ素晴らしい評論を送ってくれたと彼に知らせたところ、およそ次のような返事をくれました。それは良かったですね、僕とレーア家は今ではハインリヒか

ら全然何も送ってもらえません、ハインリヒには僕がいかに高く彼を評価しているか知って欲しいと思う、ただ彼の最近の小説はどれも楽しめませんでした。——これは間違っているとは言えないのじゃなくて？——お前が『愛の狩猟』の中でミュンヘンの有名人たちをモデルにして余りにひどく描いたのが、レーアのような地位にいる人にとっては不愉快なのです。それにピーアバウムはかんかんになって怒りました。しかし何を書こうと、ペンでどんな挑発を行おうと喧嘩を売ろうと、お前は一人ぼっちになる訳ではないのです。でもハインリヒ、もう一度言いますけれど、今度の翻訳の後に書くものは、もう少し不道徳性を弱めた方がいいのじゃないかしら。私は本当に心から、お前も周囲から認められるようになることを願っています。なぜなら、残念なことですが周りから認められなくては作家は一人前とは言えないからです。そして母である私にとっても、お前たちの一方が悪評にさらされていてはいつだって心が痛みます。送ってもらったような好意的な批評を読んだり、会った人から賞讃を受けたり、お前たちの収入が上がったと聞くと、いつもとても嬉しくなります。お前も翻訳で悪くない収入があったのではないかしら。それもお前だからこそできることでしょう。お前たち兄弟は二人とも神の恵みを受けた人間なのですよ——ですから、トーマスとレーア家への関係を悪くしてはいけません。お前の最近の仕事が気に入らないというだけのことで、どうしてたった一年半の間にそんなに変わってしまえるのでしょうか。兄弟同士の関係にはそんなことは何の関わりもないではありませんか！ お前の手紙のことはトーマスやレーア家には言わないでおきましょう。お前が自分で万事を元通りに収めた方がいいでしょうから。——もっとも、私から話して欲しいとお前が望むなら別です。お前がなぜ冬中遠ざかっていたかをトーマスに話したり、お前がトミーとうまくいかなかったからとレーア家に説明したりして欲しいというなら、私はそうしないでもありません。でもそうするとお前の方は相変わらず彼らに対してひきこもったままということになります。だからお前から言った方がいいと思うのです。》(下線部は原文で斜字体)⁽²⁶⁾

ここから何が分かるだろうか。ハインリヒの孤独感や鬱々とした気分は1904年の11月になっても相変わらず続いていて、しかもそれを母に手紙で漏らしたという事実である。これはよほどのことと見ていい。

母はここで、弟に作家としての知名度で差をつけられさらに自作を批判されたことが落ち込みの原因だろうと推測して、優しい慰めの言葉を連ねている訳だが、果たしてそれだけが原因だろうか。マン兄弟の確執が顕在化する発端となったトーマスの例の書簡が1903年12月5日に出されたことを改めて思い出してみたい。すでにそれから一年を経過しようとしている時期に、ハインリヒは落ち込んでいると母に訴えたのである。例の書簡だけを原因とするには時間がたち過ぎているのではないか。

そこで改めて母の手紙の第一段落に注目しよう。《結婚式の準備もしなくては》と書かれている。無論、トーマスの結婚式のことである。トーマスは母が上の手紙を書く一カ月前、1904年10月にカチア・プリングスハイムとの婚約にこぎ着けていた。以後、結婚式に向けて当人同士は言うまでもなく、双方の親も忙しくなってくる。

翻って、トーマスの一年前の書簡はハインリヒを激怒させたが、それですぐ兄弟の文通がやんだ訳ではなかった。Ⅷの(1)で見たとおり、それから幾度かやりとりはあったのであり、1904年2月27日付け書簡でトーマスはカチア・プリングスハイムと知り合っていると兄に打ち明け、次の3月27日付け書簡でカチアとの結婚を真剣に考えていると報告したのだった。そしてそれを最後に兄弟の文通はしばらく途絶えてしまうのである。

これは偶然とは思われない。おさらいをすると、トーマスは以前から兄の唯美主義への批判や『トーニオ・クレーガー』によって芸術家の住む気違い村から離れますよと信号を送っていたのだが、それがカチアによって現実化したのであった。ボヘミアン時代に終止符をうち、市民生活を送ろうというトーマスの意志の顕在化。トーマスのこの動きを誰よりもよく見ていたのは、トーマス本人を除けばハインリヒだったのである。

ハインリヒ自身、トーマスのこうした変化に感じるところはあっただろう。この時期唯一残されているトーマスへの手紙の下書き（連載第4回に訳出）には、『トーニオ・クレーガー』のテーマである平凡さへの憧れは自分にも無縁なものではないと書かれていた。⁽²⁷⁾『ウンラート教授』にしても、主人公の初老の教授にはある種の人恋しさが表現されていたと見ることができる。

そうしてみると、1904年3月以降兄弟の文通が途切れた理由が浮かび上がってくるのではあるまいか。ハインリヒには、トーマスが意中の相手を見つけて

結婚しようとしていることがショックだったのだ。『ブッデンブローク家の人々』で作家としての地位を確立したのみならず、共に作家志望の青年としてボヘミアン時代を送った共同意識に背を向け、身を固めてしまうトーマス。この時ハインリヒを襲ったのは、きわめて生々しく身を切るような、一人取り残されてしまうという孤独感だったに相違ない。そうでなければ、単に作家としての知名度で弟に遅れをとったというだけなら、ランゲン書店のカタログに載せた自己紹介文のような激しい表現や、敢えて母への手紙で心の不調を訴える（33歳の男がである！）といった行動に出るはずがない。『トーニオ・クレガー』で理論的基礎固めをしたトーマスがカチアと出会って実際に自分がどう生きるかを決心したとするなら、弟のこの行動は兄にも、お前は実際にどう生きていくのだという問いを真正面から突きつけたのである。

青年期のボヘミアンは一方では独りでいる時間を求めて親兄弟から離れるが、他方では自分と志を同じくする仲間を求めずにはいられないものだ。ハインリヒとトーマスは兄弟ではあるが、ともに作家志望という点で結ばれ、一緒にイタリアに滞在したこともあり、離れて暮らしても手紙のやりとりは欠かさなかった。こうした青年期の微妙な心理状態について巧みに説明しているのは、フランスの批評家ティボーデである。彼は『フローベール論』の中でこう述べている。

《フローベールの人生においては友情が恋よりも大きな役割を果たした。彼は（…）〔友人という〕もう一人の自己を必要とした。ちょうどルイ十四世が妾たちを政治に介入させなかったように、彼は創作活動を恋人たちの手の及ばぬところで行ったが、一方友人たちの影響と助言にはきわめて従順だった。（…）互いに叱咤しあう友人なしでいられぬこと、このことは——恐ろしいことだが——青年本来の姿なのだ。》⁽²⁸⁾

このような微妙な関係は、トーマス・マンとその友人の間にも見られる。カチアに出会う以前にトーマスが友人パウル・エーレンベルクにいさか過激とも言える調子で友情を求めたことはすでに述べたとおりだが、トーマスが結婚すると二人は一時期疎遠になり、パウルの方も一年とたたないうちに結婚してしまうのである。⁽²⁹⁾

人はいつまでも若いままではないし、青年期を過ぎてなおボヘミアンであり続けることもできない。トーマスは結婚によってボヘミアン時代に終止符を打

とうとした訳だが、ハインリヒは弟のこの選択により、遅ればせながら、自分にもボヘミアン時代の終わりが迫っているのだと思知らされたのではないだろうか。

また、母の手紙の最初の部分から、彼が母に病気を癒すためイタリアに来てみたらと誘いをかけたことが分かるが、これも一種の家族回帰的行動だったのかも知れないのである。

さて、以上述べたこととは別に、母の手紙はハインリヒに自分のおかれている立場を客観的に照らし出す役割をも果たしたであろう。すなわち母はここで優しい言葉を重ねて長男を慰めようとしているが、しかし一方で現時点では次男トーマスの方が作家として世間に認められていることをはっきりと書いており、《残念なことですけど周りから認められなくては作家は一人前とは言えないからです》とも述べているからだ。また『愛の狩猟』の作風が感心できなかった点でも必ずしもトーマスや長女夫妻であるレーア一家と見解を異にしているわけではない。そうであるだけ、ハインリヒにはなおのこと自分のおかれている立場がひしひしと感じられたであろう。

実際、これ以降の母とのやりとりを見るとハインリヒの対応は特徴的である。母の次の書簡は1カ月半後、翌1905年1月4日付けである。ここで母は《お前は長いこと手紙をよこしませんね》と書き出している。⁽³⁰⁾ハインリヒは先の母の手紙に返事を出さなかったのであろう。ハインリヒのこの沈黙は興味深い。彼の孤独感は先の母の手紙でよくなるどころかいつそう深まったのだ。

そして、先の書簡では言葉を尽くして長男を慰めた母は、今回の書簡ではトーマスの結婚問題に長々と触れ、マン家とプリングスハイム家の宗教や家風の違いから来るごたごたをぶちまけて、《沢山のお金があると冷たくて尊大になるものです》《他にもトーマスを愛してやれるような、愛らしくて我がままでない娘は沢山いたでしように》とまで書いている。しかし追伸で、夏の間カチアがトーマスからの手紙をいつも心待ちにしていたとカチアの母が言っていたことに触れ、事態が急に別様に見えてきました、変なことを書いてしまったけれどこれも母の愛からですと述べ、結婚式にはお前もきつと来るのですよと締めくくっている。⁽³¹⁾結婚直前に双方の実家が気を揉む様子は、時代と洋の東西を問わず同じだと感じさせるほほえましい手紙ではあるが、孤独に苦しむハインリヒには逆に、弟とそれを囲む人々の市井の幸せというものが伝わってきてや

りきれないと思われたのではあるまいか。母は恐らく、この手紙がどれほどハインリヒにとってこたえるか、予感すらしていなかった。

母ユーリアは、翌1月5日とその二日後の1月7日にもトーマスの結婚のことでハインリヒに手紙を書いている。7日の手紙はハインリヒの返信を落手したとの文章から始まっているので、ハインリヒが1月4日付けの母の手紙にすぐ返事を出したことが分かる。恐らく、トーマスの結婚式には出られないと書いたのだろう。母はここで、カルラが出られないらしいのでお前には是非出てもらいたい、簡素な式になるはずだし、トーマスもお前の出席を望んでいるのだからと述べている。⁽³²⁾

次の母の手紙は1月19日付けである。ハインリヒのよこした葉書に礼を言っているが、結婚式に関することをお前は何も書いてきませんでしたねと述べている。⁽³³⁾それ以外はハインリヒの新作『女優』への感想が大半を占めている。なぜハインリヒは返信でトーマスの結婚に触れなかったのだろうか。関心がなかったからではあるまい。この時期に母がトーマスの結婚問題にかかりきりになるのは当然だし、もし仮に弟の結婚に興味がなかったとしても、式の準備に忙殺される母の手紙には一種の義務感でもって相づちを打つ程度の反応は示すのが自然だろう。むしろ逆で、彼はトーマスの結婚問題にひとかたならぬ関心を抱いていたが、しかしその件に触れると自分の孤独感が掘り下げられるようで嫌だった、と考えるべきではあるまいか。

トーマス自身も1904年12月23日に、久しぶりに兄に手紙を書き、どうか私の結婚式に出て下さいと丁重に頼んでいる。⁽³⁴⁾しかし、ハインリヒは弟の結婚式には出なかった。それも当然だろう。自分の身を切るような孤独感を深めるために、わざわざ遠い距離を出かけていく気になれなかったのだ。彼がトーマスの式に出なかった主たる理由はそこにしかない。

こうして、1905年2月11日のトーマスの結婚式が近づく頃、ハインリヒの精神的危機は頂点に達したのである。

*

なお補足として、近年続けて出ているトーマス・マン伝が、この辺の事情についていずれもきちんとした記述をしていない点に触れておきたい。1995年は

トーマス・マンの日記（死後二十年は開封するべからずとの遺言に従って、75年に初めて研究者の目に触れ、77年から順次刊行されていた）が第10巻をもって完結した年であると同時に、大部のトーマス・マン伝が英国から二冊、ドイツから一冊出るといふ、いわばトーマス・マン研究の当り年であった。

- ① Ronald Hayman: Thomas Mann. A Biography. London (Scribner) 1995
- ② Donald A. Prater: Thomas Mann. A Life. Oxford University Press. 1995 (übersetzt von Fred Wagner: Thomas Mann. Deutscher und Weltbürger. Eine Biographie. München [Hanser] 1995)
- ③ Klaus Harpprecht: Thomas Mann. Eine Biographie. (Rowohlt) 1995

しかし結婚前後のハインリヒとの関係という点で見ると、いずれもおおざりな記述しかしていない。理由は簡単で、トーマスの作品や書簡には目を通して、ハインリヒ側にはろくに目配りをしていないからである。

例えば Ronald Hayman は、ハインリヒがトーマスの結婚式に欠席したのは、かつて自分が『逸楽境にて』で風刺した上流市民社会に弟が入って行くのを見て批判的な感情を抱いたからだといふ。⁽³⁵⁾この見方には、『逸楽境にて』の後に書かれた『女神たち』三部作の貴族主義や『ウンラート教授』の人恋しさ、また本論の次項でとりあげるハインリヒのエッセイがまったく視野に入っていない。後年のハインリヒの社会批判的姿勢がステレオタイプの若年期の作品に投影されているだけである。おまけに Hayman は、ハインリヒは弟の結婚に批判的なところを見せるために式に欠席したばかりか、そのせいで、やはり式に欠席した次妹カルラの選んだプレゼントが彼のプレゼントをも兼ねることになったと述べているが、これも誤りで、本論Ⅷの註(12)で述べたように、欠席した二人の名義によるプレゼントは出席した長妹ルーラが調達したものと考えられる。

Donald A. Prater も、『ハインリヒはトーマスの作家としての成功を妬んだかも知れないが、結婚による新生活を羨みはしなかったろう。むしろ、軽蔑とはいかないまでも強い嫌悪感をもよおした』《ハインリヒはいずれにせよイタリアから〔弟の結婚式のために〕戻ろうとは思わなかった。旺盛な創作意欲のみならず、彼自身のイーネスとの恋愛が、ハインリヒをイタリアに縛りつけ

ていた》と簡単に述べている。⁽³⁶⁾前半は Hayman と同じ線だし、後半の見解は Peter de Mendelssohn の説をそのまま受け入れたものと思われるが、これに問題があることはすぐ後で触れる。

Klaus Harpprecht は1904年11月の母の手紙に触れて、この時期のハインリヒが落ち込んでいたことには言及しているが、《母の手紙はトーマスの婚約には触れていない》⁽³⁷⁾とするなど、かなり杜撰な読み方しかしていない。(先に述べたとおり、母の手紙は第一段落でトーマスの結婚式に触れている。)

上記三書以外に、マン家の多数の人物を扱った Marianne Krüll の „Im Netz der Zauberer“ も1991年に出ているが、Krüll は Mendelssohn に依拠しつつあっさり《イーネスがいたのでハインリヒはトーマスのミュンヘンでの結婚式に来なかった》と断定している。⁽³⁸⁾

諸家がこうした不十分な解釈しかできないのは、ハインリヒ・マンに関してきちんとした文献にあらず、またこの時期にハインリヒの書いたものを綿密に読まず、Mendelssohn のトーマス・マン伝の記述をかなり簡略かつ恣意的に引用して済ませているからである。これが例えば Klaus Schröter が rororo の Bildmonographie シリーズから出している „Heinrich Mann“ を参照するだけでもずいぶん違って来たであろう。Schröter は、この時期のハインリヒが心理的に落ち込んでいて作家としても転換期にあった事実を的確に指摘しているからだ。

さて、そこで20年前に出た Mendelssohn によるトーマス・マン伝 „Der Zauberer“ がハインリヒがトーマスの結婚式に来なかった事情についてどう記述しているかを見ておこう。少なくとも上で批判した新しいトーマス・マン伝ほど単純な断定はしていないのだ。

まず注意すべきは、Mendelssohn がトーマス・マン伝第一部を出した1975年は資料面でハンディがあったことだ。トーマスがハインリヒを厳しく批判した1903年12月5日付けの書簡が当時は発見されておらず、この頃兄弟関係に大きな亀裂が走った事実を Mendelssohn は十分知り得なかった。加えて Mendelssohn は一つミスを犯している。1904年11月20日付けで母ユーリアがハインリヒに出した慰藉の書簡を、2月20日付けと誤記している。⁽³⁹⁾これは恐らく母の書簡を『マン兄弟往復書簡集』(旧版)の註釈で見、アラビア数字の11をローマ数字のIIと見間違えたからであろう。ドイツではアラビア数字の

1の上端が横棒になることがよくあり、アルファベットのIと取り違えやすい。『マン兄弟往復書簡集』のアラビア数字もそうなので、見誤りはそのためだろう。また『マン兄弟往復書簡集』での引用は、「結婚式」に触れている最初の段落を省略してある。結婚式という単語があれば、この時期のマン家の結婚式とはトーマスのそれしかなく、またトーマスとカチアの婚約は10月であり2月段階では知り合ったばかりであるから、Mendelssohnも2月と間違えることはなかっただろう。

ともかく母の手紙を実際より9カ月前のものとしてしまったために、Mendelssohnはこの時期のハインリヒの心の不調が『愛の狩猟』をめぐるいざこざから来たものだろうと推測することになった。これは母の手紙の内容や当時すでに知られていたトーマスのマルテンス宛て書簡(III註(6)参照)からもそう類推できるからだが、いずれにせよ『愛の狩猟』をめぐるごたごたと、ハインリヒが母に心の不調を訴えるまでに1年近い時間がたっている事実を Mendelssohn は気づかなかったのである。

以上のようなハンディとミスがありながら、ハインリヒがトーマスの結婚式に来なかった理由を述べる Mendelssohn の筆は慎重を極めている。⁽⁴⁰⁾欠席にはいくつか理由が考えられるとして、第一に執筆に忙しかったからではないかとする。1904年12月に短篇集『笛と短刀』が出たばかりだし、すでに脱稿した『ウンラート教授』も1905年初めに出る予定になっていた、妹カルラをモデルにした短篇『女優』も執筆中だった、と。

この Mendelssohn の記述にも誤りがある。『女優』は1904年の9月から10月にかけて執筆され、12月19日と翌年1月19日にはすでに前刷りがウィーンの日刊紙 „Zeit“ に掲載されていたのだ。⁽⁴¹⁾そもそも前述のとおり、母ユーリアは1905年1月19日付けのハインリヒ宛ての書簡で『女優』への感想を述べているのである。12月に „Zeit“ 紙に載った分をハインリヒが送ったのであろう。だから2月11日の結婚式に来なかったのは『女優』執筆のためとする説は成り立たない。ただしこれはいちがいに Mendelssohn の不注意を責められない。ハインリヒの生涯や作品の成立時期についてはトーマスと違って不明瞭な部分はまだ多く、流布しているハインリヒの作品集のあとがきなどにも時折誤った記述が見られるからだ。『女優』について言えば、その成立についてきちんとした解説がついたのはアウフバウ書店版全集の「短篇小説集II」が最初で、こ

れは1978年に出ているから、75年にトーマス・マン伝第一部を出した Mendelssohn は参照できなかったことになる。⁽⁴²⁾だからむしろ責められるべきは、新しい資料を漁らずに安易に Mendelssohn に依拠している最近のトーマス・マン伝の方であろう。

それは別にしても、作品執筆による多忙が弟の結婚式に出ない理由になるだろうか。外国滞在中といってもハインリヒは地球の裏側にいた訳ではない。北イタリア・ガルダ湖畔北端の町リヴァで、ここから南ドイツのミュンヘンまでは直線距離にして250キロほどである。ミュンヘンから中部ドイツのフランクフルトに行くより距離的には近い。現在とは交通事情が異なるとはいえすでに20世紀、ゲテ時代のような馬車での旅行ではなく、ちゃんと鉄道が通っていたのだ。これより四半世紀前の1879年のプロイセンの資料では、停車なしの場合急行列車の平均速度は毎時53キロ、普通列車でも40キロとなっている。⁽⁴³⁾また、1909年版の Baedeker ドイツ地図によれば、ミュンヘンから62キロ離れたパイセンベルクまで鉄道で2時間15分ないし30分だという。⁽⁴⁴⁾だからリヴァーミュンヘン間とは朝発てば夜も更けないうちに到着する距離であったろう。弟の結婚式のためにほんの数日もさけないほどハインリヒは執筆に忙しかっただろうか。彼は作品を書けば書店が出してくれる程度の作家ではあったが、矢継ぎ早に執筆を催促されるほどの存在にはまだなっていなかったではないか。

次に Mendelssohn は、ハインリヒが結婚式に来なかった第二の理由として、新しい親戚と顔を合わせるのが嫌だったから、またマン家の家族とも『愛の狩猟』以来ごたごたがあつて会いたくなかつたからかも知れないとしている。私はこれは理由の一つとしては十分考えられることだと思ふ。そしてそれは、恐らく後年の彼の社会批判から推測されるような反上流市民的姿勢からというよりは、余りに長くボヘミアン時代を過ごした彼には形式的な人間づきあいがただただわずらわしかったから、或いはそもそも内気な彼は人間との交際が不得手だったからととるべきだろう。次作長篇『人種の狭間で Zwischen den Rassen』では、ハインリヒのこうした側面が青年アルノルト・アクトンの姿で克明に描かれている。

第三の、そして最もありそうな理由として Mendelssohn は、ハインリヒがのちに婚約者となるイーネス・シュミートとこの頃知り合つて離れたくなかつたからだとして述べている。この説が Prater や Krüll に無批判的に受け入れら

れていることは上で見たとおりだが、実はこの説は誤りである可能性が濃厚なのだ。つまりトーマスの結婚式が行われた2月11日には、ハインリヒとイーネスはまだ知り合っていなかったとする方が、目下の資料では適切と考えられるからである。この点については次項でハインリヒのエッセイ『ギュスターヴ・フローベールとジョルジュ・サンド』を扱った後、改めて触れることにする。

ハインリヒ同様トーマスの結婚式に来なかった下の妹カルラのことにも簡単に触れておこう。女優業を営むカルラが式に出席しなかったのは、遠い町の劇場との契約があって当地を離れられなかったからである。長兄とは異なり明瞭な理由があって欠席した訳であるが、しかし当時の彼女の心境は、友人グラウトフへの返信（1904年12月31日付）から見て取れる。何とか都合をつけてお兄さんの結婚式に来てあげたらいいじゃないか、それが駄目なら祝婚歌でも作ってあげたら、と勧めたグラウトフに、彼女はこう書いている。

《結婚式には行けません。そのことはママとルーラとトミーとカチアに伝えましたし、これであなたにも伝えた訳ですから、全員に伝達済みということになりますね。歌も作れそうもありません。もしこの手紙を滑稽に思われたなら残念です。意図してそう書いたのではないので。意識して滑稽さを出すことなどできそうもありません（…）ここはとても素敵です。おまけに流行性髄膜炎とチフスまで流行っています（…）》⁽⁴⁵⁾

女優としてのカルラは決して成功を収めていたとは言えなかった。出演は小さな町の劇場で、契約も一シーズン限りという状態が続いていたからである。この手紙は、女優を志しながら容易に芽が出ない彼女の凍えるような心理状態をうかがわせて興味深い。

この時、マン家の兄弟姉妹たちははっきり二つのグループに分かれたのだ。すなわち『ブッデンブローック家の人々』で作家として名をなし、裕福な大学教授の娘と結婚する次男トーマス、そして金持ちの銀行家の妻になっていた長女ユーリア（ルーラ）が一方の側にいたとすると、売れない作家である長男ハインリヒと、やはり売れない女優である次女カルラが他方に立つことになる。年齢の離れた末弟ヴィクトルを除いて、成功した二人とそうでない二人が対峙する。そして成功していない二人がそろってトーマスの結婚式に欠席したのは、この分裂の象徴的な現れだったと言っていい。⁽⁴⁶⁾そしてこの分裂は、1910年に

はカルラの自殺，第一次大戦期には本格的な兄弟喧嘩という形で悲劇的な展開を見せるのである。

ちなみにトーマスの友人で式に出席したのはグラウトフただ一人だった。この結婚式はその点から見ても，トーマスにとっては孤独な船出だったと言えよう。

註

- (6) Sigrid Anger (hg.): Heinrich Mann 1871–1950. Berlin (Aufbau) 1977 S.77
- (7) Hans Bürgin: Das Werk Thomas Manns. Eine Bibliographie. Berlin (Akademie-Verlag) 1959 S.19
- (8) 例えば『キネマ旬報増刊・ヨーロッパ映画作品全集』(キネマ旬報社, 1972年) や猪俣勝人『世界映画名作全史・戦前編』(社会思想社, 1974年)。
- (9) H. L. Arnold (hg.): text+kritik. Heinrich Mann. München (text+kritik) 1986 S.9
- (10) Albert Klein: Der aus dem Häuschen geratene Schulmeister. Zur Entstehungsgeschichte von Heinrich Manns „Professor Unrat“. In: Hans Georg Kirchhoff (hg.): Der Lehrer in Bild und Zerrbild. 200 Jahre Lehrerausbildung. Bochum (N. Brockmeyer) 1986 S.118–141. 特にS. 127ff.
- (11) Willi Jasper: Der Bruder. Heinrich Mann. München (Hanser) 1992 S. 204f., 379
- (12) H. Mann: Briefe an Karl Lemke und Klaus Pinkus. Hamburg o.J. (1964) S.45
- (13) H. L. Arnold, a.a.O. S.10
- (14) Briefe an Ewers. S.410
- (15) Ibid. S.416
- (16) H. Mann: Professor Unrat (FS). S.261
- (17) Max Schroeder は次のように言う。《『ウンラート教授』が1905年に出版された時 (...) リューベックの市民たちには好意を持たれなかった。この本に登場する人物のモデルに利用された人間が多かったからだ。》
In: Sigrid Anger, a.a.O. S.100
- (18) Albert Klein, a.a.O. S.121
- (19) Klaus Schröter: Heinrich Mann. (rororo) S.62

- (20) Marcel Reich-Ranicki: Thomas Mann und die Seinen. Stuttgart (DVA) 1987 S.130f.
- (21) 1905年7月25日付け、ハインリヒからイーネスへの書簡。Sigrid Anger, a. a. O. S.106f. また „Zwischen den Rassen“ (FS) S.488にも収録。
- (22) Thomas Mann: Notizbücher 7-14. S.115
- (23) Mendelssohn, a. a. O. S.651
- (24) 『マン兄弟往復書簡集』への Wysling の序文を参照せよ。THBW, S. XXXIVf.
- (25) Sigrid Anger, a. a. O. S.77ff.
- (26) Julia Mann: Ich spreche so gern mit meinen Kindern. Berlin (Aufbau) 1991 S.130ff. 訳出にあたり新潟大学外国人教師 Beate von der Osten 先生のお世話になった。
- (27) THBW, S.40
- (28) ティボーデ『フローベール論』戸田吉信訳, 東京(冬樹社), 1966年, 198ページ。訳文は一部変更してある。
- (29) パウル・エーレンベルクの婚約については1905年10月17日付けのトーマスの宛て書簡に書かれている。THBW, S.60 またパウルの結婚については Mendelssohn, S.621参照。
- (30) J. Mann, a. a. O. S.134
- (31) Ibid. S.136 なおこの手紙の内容を深刻にとる立場もあるようだが (K. Schröter, Heinrich Mann. S.56), 私はそれにくみしない。家風を異にする家族同士の結びつきではこうしたごたごたは起こりがちで、結婚する当人より周囲の方が神経質になるものだからである。実際この母の手紙には、長女ルーラに同じような話をしたところ、「私はカチアのトーマスへの愛を信じるわ」と言われたとある。年齢的にトーマスやカチアに近く、自らも4年前に結婚したばかりだったルーラは、母の心配が杞憂に過ぎないと判断する理由を持っていたのだろう。
- (32) Ibid. S.138
- (33) Ibid. S.141
- (34) THBW, S.53ff.
- (35) Hayman, p.207sq.
- (36) Prater, S.94
- (37) Harpprecht, S.248
- (38) Marianne Krüll: Im Netz der Zauberer. 1991 (Arche) S.262
- (39) Mendelssohn, a. a. O. S.597f.
- (40) Ibid. S.627f.
- (41) H. Mann: GW, Bd.17 Novellen II S.425f.
- (42) 流布しているハインリヒ・マン作品集の誤った記述の例をこの『女優』につい

て挙げるなら、レクラム文庫版の『ハインリヒ・マン芸術家小説集 Heinrich Mann: Künstlernovellen』がそうである。この版は1987年に出ているからアウフバウ書店版の全集を参照できたはずなのに、『女優』は1904年から1905年にかけて成立し単行本になったのは1910年であると、解説の Heide Eilert は誤記している〔同書173ページ〕。

- (43) Zug der Zeit-Zeit der Züge. Deutsche Eisenbahn 1835-1985. Bd.1 Berlin (Siedler) 1985 S.116
- (44) Baedeker's Deutschland in einem Bande. Leipzig 1909 S.410
- (45) Mendelssohn, a.a.O. S.629
- (46) Ibid. S.579